

子どもの困り感に寄り添うことで学校適応がうまくいった事例

キーワード： **子どもの困り感に寄り添う**

保護者への寄り添い方(1)(2)

この事例解説では、問題を抱える子どもとその保護者、学級の子どもたちに対して、学級担任として行った支援に焦点を当ててまとめました。

問題の概要

4年生から担任することになったAは、3年生ころから、授業中に教室を飛び出したり周囲の子とのトラブルを繰り返したりして、学級にうまく適応できていなかった。4月当初は、学級を飛び出すだけでなく、校地外に出たり休み時間が終わっても戻ってこなかったりすることが続いていた。また、周囲の子の言動に反応して大声を上げたり、物を投げたりすることも多かった。そのため、Aは、学級の子どもたちから敬遠されることが多かった。周囲の子の保護者からは、Aの様子を心配する声が数多く聞かれた。Aの母親に話すと、母親自身もどうしてよいかわからない様子で困り果てていた。

対応の概要と実践のポイント

1 子どもの困り感に寄り添った支援

まず、Aとの信頼関係を作り上げることから始めようと考え、休み時間や放課後など、一緒に過ごす時間を多くした。始めはうまくコミュニケーションがとれなかったが、Aが一番関心をもっているテレビアニメの話をするようになると、担任の話をしきりに聞くようになってきた。そのうち、「どうせ、おれのことは馬鹿だとみんな思っている」と、周囲から疎外されていると感じていること、カッとすると気持ちを抑えきれなくなることを話してくれるようになった。

そこで、不適切な行動が少なくなっていけばみんなから認めてもらえることを伝え、様々な場面での適切な行動の仕方を担任が教えていくこと。それがきちんとできるようにがんばっていくことを約束した。

また、その日にがんばったこと、できたことを一緒に確認し、連絡帳に書いてあげることにした。Aもそれを励みにし、できることが少しずつ増えていった。

2 母親を支える関係づくり

母親は、Aの問題行動の多さに困り果ててい

た。また、様々なことを学校から言われ続けていたようで、学校に対して心を閉ざしている様子が見られた。そこで、母親を責めるような言葉掛けは避け、母親の困り感に寄り添いながら、一緒に考えていくという姿勢を心がけた。また、医療機関の受診が始まっていたので、学校での様子を正確に話し、主治医に伝えていただくようお願いした。その結果、「ADHD」と診断され、「リタリン」を服用するようになった。その結果、授業中に飛び出したり、周囲の言動に反応して大声を上げたりする行動がみられなくなってきた。

また、連絡帳を使い、その日にがんばったことを伝えていくことを繰り返したことにより、Aの学校での様子に安心感をもち、担任に対しても心を開いてくれるようになった。その結果、担任から様々なお願いをしても快く協力してくれるようになり、Aの成長に対してよい影響が見られるようになった。

3 寄り添う学級づくり

3年生のころから、Aの行動に振り回されてきた学級の子どもたちは、Aのことを嫌っている子が多かった。また、度々学級内を乱され授業に集中できない状況が続いていたために、落ち着きがなく話を集中して聞けないなど、学習習慣も崩れていた。そこで、学級の子どもたちに対して「楽しい授業」「わかりやすい授業」をきちんと行っていく中で、学級を落ち着かせていこうと考えた。そのために、授業中Aが飛び出したり、休み時間が終わっても戻ってこないときなどには、担任外の先生方に対応してもらおうこととし、担任は授業をしっかりと行うことを心がけた。

また、Aに対する接し方のモデルを示す必要があると考え、Aが不適切な行動をとったときには、厳しく叱責するのではなく、適切な行動をその都度丁寧に教え、できたらほめてあげるということを繰り返していった。

そのうち、Aの行動が落ち着いてくると、周囲の子どものかかわり方も変化が見られ、仲のよい男友だちができて一緒に遊ぶようになった。また活動の方法がわからず困っている時に、やさしく教えてあげる女子の姿がみられるようになってきた。

子どもの困り感に寄り添う

「困った子ども」として否定的にとらえてしまうのではなく、様々な問題状況をかかえて「困っている子ども」「苦戦している子ども」として理解し、その心に寄り添いながら、どのようにかかわっていくことがその子どもの成長につながるのかという視点に立つことが重要です。

1 子どもと学級の状態、状況

授業中教室を抜け出したり、休み時間が終わっても教室に戻ってこない。

- ・学習活動に取り組めない。興味をもった活動だけ。
- ・周りの子の言葉に反応して、物を投げたり教室を飛び出したりする。

学級が全体的に落ち着きがない。話をしっかり聞けない子が多く、学習に対して集中して取り組むことができない。



2 支援のポイント

担任一人では対応できない。学年体制、学校体制での支援の方法を考える

- ・校内電話でのSOS 職員室にいる先生方に応援してもらう。
- ・行動パターンに合わせて、校内巡視や学級指導に入ってもらおう
- ・学級の指導で不足の点は、学年全体で指導していく

(学年集会、各種行事への取り組み等)

- ◎ 自分だけで抱え込まない。助けてもらうのは当たり前
「助けられ上手は助け上手」

子どもとの関係をつくる

- ・興味関心のありかを探る
- ・小さな目標を立て、成功体験を積み重ねていく(行動のちょっとした変化を目標に)

- ◎ ともに頑張りを確かめ合えるように

保護者との関係をつくる

保護者を責めるのではなく、ともに考えていきましょうという姿勢で

- ・実態を正しく報告し理解してもらおう
- ・どんな些細なことでもいいから、よかったこと、頑張ったことを積み重ね毎日報告する(連絡帳で)
- ・学校の支援策の具体化を図るために専門機関へつなげる

- ◎ ともに成長を喜び合えるように

学級全体を育てる

- ・授業の準備をしっかり行い、授業を通して学級を育てていく
- ・学習に集中して取り組めるようになると心が落ち着いてくる

- ◎ 学年という大きな「枠」の中でお互いに刺激し合いながら成長させる

保護者も支えながら、協同作業で子どもの成長を見守っていく。

の手を借りて支援を行っていきたい。

「学校は、協力・協働の場」

